

## 要 旨

The Impact of Japanese College Students' Majors  
and Personality on Communicating in English :  
Focusing on the Use of Communication Strategies

森川 慧子

本修士論文は、性格や大学での専攻が日本人英語学習者のコミュニケーション方略 (Communication Strategy, CS) の使用に対してどのような影響を与えるのかについて、英語専攻の学生に調査した。

本研究は京都の私立女子大学の4年次生の英語英文学科と国際教養学科に所属する196名を対象として実施した。参加者には、英会話でのCS使用や性格、英語学習歴について尋ねた質問紙への回答を依頼し、データを収集した。

この論文の研究課題は以下の3つである。(I) 日本人英語学習者の大学の専攻は、CS使用に影響を与えるのか。また、(II) 日本人英語学習者の性格は、CS使用に影響を与えるのか。(III) 日本人英語学習者の大学の専攻と彼らの性格は、彼らのCS使用に与える影響はあるのか？

研究課題 (I) の結果より、以下のことが明らかになった。(1) 学生の大学での専攻が彼らのCS使用に与える影響には、統計的に有意な傾向がみられた。国際教養学科の学生が英語を話すときに最もよく使うCSは、negotiations for meaningであった。また有意な傾向としては、彼らは英語を話すときに fluency-oriented strategy を使用していることが分かった。一方、英語英文学科の学生は、less active listening strategy を多く使用していた。(2) 国際教養学科の学生は、英語を母語とする親しい友人、英語を母語としない親しい友人、ホストファミリーと話す際に、negotiations for meaning のCS使用率が高かった。さらに、このCSを主に教室外で使用していることに有意差が見つかった。

次に、研究課題 (II) の結果について次のことが分かった。(3) 学生の性格が彼ら

の CS 使用に与える影響に関して、有意差が認められた。外向的な人は、message reduction と alteration strategy を頻繁に使用する。一方、内向的な人は、英語を話すときに最初に日本語で考える CS を使っていた。また有意な傾向として、英語を聞くとき less active strategy を使用していることが明らかになった。

最後に、研究課題（Ⅲ）の結果に対して次のことが明らかにされた。(4) 英語英文学科の学生に比べ、国際教養学科の学生は外向的であった。(5) 学生の大学での専攻と性格が彼らの CS 使用に与える影響には、統計的に有意な傾向が見られた。国際教養学科の外向的な学生は、英語を話すとき message reduction と alteration strategy、英語を聞く際は nonverbal strategy を頻繁に活用している。英語英文学科の外向的な学生については、scanning strategy と word-oriented strategy の使用において、統計的に有意な傾向がみられた。(6) CS の使用状況において英語英文学科の内向的な学生は、英語を聞くとき教師の表情に最も注意を払っていた。(7) 英語英文学科と国際教養学科の学生の CS 使用は、周囲の環境から影響を受けていると言える。両学科のカリキュラムの違いや、会話の中で CS 使用制限というトレードオフの関係によるものと推測される。

以上の結果より、英語学習者それぞれの性格や環境に合った CS を見つけることの重要性が明らかになった。